

令和4年度

知床半島先端部地区利用状況調査業務 報告書



令和4（2022年）12月

公益財団法人 知床財団

報告書概要

1) 業務名

令和4年度 知床半島先端部地区利用状況調査業務

2) 業務目的

本業務は、知床国立公園の適正な利用を推進する上で必要な基礎データを収集することを目的とし、先端部地区を利用する利用者の動向を現地での聞き取り調査により把握した。

3) 業務実施体制

本業務は、環境省からの請負業務として、公益財団法人 知床財団が実施した。

4) 実施概要

(1) 入域調査

先端部地区利用者への聞き取り調査は、2022年7月28日から31日、8月11日から14日の期間で計8日間行った。調査場所は、先端部地区の入り口である相泊の入林箱付近である。聞き取り項目は、グループ人数、年齢層、利用形態、目的地、行動予定、ヒグマ対策の状況、知床世界遺産ルサフィールドハウスへの立ち寄りの有無、知床半島先端部地区 利用の心得（以下、「利用の心得」とする）とそのwebサイトである「シレココ」の認知状況である。本調査で67組145名を対象に聞き取りを実施した。

(2) 2020年度から2022年度に実施した入域調査結果の取りまとめ

先端部地区利用者の動向を把握するための入域調査は、2020年度から実施されており、2022年度までの3年間の累計で141組315名を対象に聞き取りを実施している。本業務ではこれらのデータを統合し、先端部地区利用者の3年間の推移をたどる。具体的には、①利用形態、②ヒグマ対策の有無、③ルサフィールドハウスへの立ち寄り状況、④利用の心得及びシレココの認知状況の4点に着目した分析を行う。

(3) その他

業務実施中に「利用の心得」から逸脱した不適切な利用（不十分なヒグマ対策、たき火の実施、ゴミの投棄、番屋への宿泊、釣魚の投棄等）が認められた場合には、当利用者に「利用の心得」について説明を行った。

また、業務実施中に、コース上の難所の状況変化（落石や崩落等）、ヒグマ出没情報等について確認した場合は記録を行うとともに、その情報を知床世界遺産ルサフィールドハウスに提供した。なお、これらの結果については、(1)入域調査の結果と一体的に報告する体裁とした。

表紙写真：相泊橋から調査地方面を撮影

目次

はじめに.....	1
1.2022 年度入域調査	2
1-1.調査概要	2
1-2.調査結果	4
1-3.その他実施事項.....	15
2.2020 年度から 2022 年度に実施した調査結果の取りまとめ.....	17
2-1.分析の方法.....	17
2-2.分析の結果.....	18
3.まとめと考察.....	22
3-1.調査手法について	22
3-2.今年度の調査結果に関する考察	24
3-3.過年度の入域調査との比較に関する考察.....	25

巻末資料

巻末資料 1. 2022 年度 知床半島先端部地区 利用状況調査表

巻末資料 2. 2022 年度 知床半島先端部地区利用状況調査 入域調査の結果一覧

はじめに

知床半島先端部地区（以下「先端部地区」という。）は極めて原始性の高い自然環境と豊富な野生生物によって形成される多様な生態系が残されている地域であり、利用のための施設が設けられていないなど、一般の利用者による積極的な利用は想定されていない。一方で、知床ならではの質の高い自然体験の機会を求めて多様な利用者が訪れる場所でもあり、適正な利用と保全を図ることが必要である。

環境省では、原始性の高い自然環境の保全と質の高い自然体験機会の提供を両立するため、レクリエーションを目的として先端部地区を利用する際のルール「知床半島先端部地区利用の心得」（以下、「利用の心得」という。）を定めるとともに、ルサフィールドハウス等の施設で先端部地区利用者へのレクチャーを実施している。さらに、知床半島先端部地区利用の心得 Web サイト、通称「シレココ」（以下、「シレココ」という。）を作成し普及活動に努めるなど、自然環境の保全を前提とした適切な先端部地区の利用を推進してきた。一方で近年、利用状況の変化や利用ニーズの多様化が指摘されており、実態を把握するための調査を行う必要性が高まってきている。

本業務は、知床国立公園の適正な利用の推進に必要な基礎データを収集するため、先端部地区を利用する又は利用したトレkkerやカヤッカー、釣り人の動向を調査し、その結果についてまとめたものである。

1. 2022 年度入域調査

1-1. 調査概要

- 先端部地区の利用状況を把握することを目的とし、羅臼町相泊において聞き取り調査を実施した。調査方法は、環境省担当官と協議の上決定し、以下の要領で実施した。
- 調査期間は7月28日から31日と8月11日から14日の2回（計8日間）に分けて実施した。これらの期間は大潮の時期に相当するため、多くの人々が先端部地区を利用するものと想定し、選定した。調査時間は午前4時から午後6時までの14時間とした。調査員は午前4時から11時まで1名、午前11時から午後6時まで1名をシフト制で配置した。調査の実施場所は、林野庁が設置した入林箱周辺である（図1、写真1）。
- 聞き取り対象は、相泊から知床岬、知床岳などを目的地とするトレkkerや登山者、相泊またはウトロ東から出艇し、知床半島沿岸をシーカヤックで周回するカヤッカー、相泊からカモイウンベ川、クズレハマ川などでカラフトマスやシロザケの釣りをする釣り人である。調査項目は、「パーティの人数、年齢層、目的地と目的地までのアクセス方法、行動予定、ヒグマ対策の状況、ルサフィールドハウスへの立ち寄りの有無、利用の心得及びシレココの認知状況」を基本事項として調査票を作成した。調査票は**巻末資料1**に収録した。



図 1. 入域調査の実施地点(赤点、聞き取り場所)

出典：電子地形図 25000 (国土地理院) を加工して作成



写真 1. 入域調査の実施場所(赤枠で示す)

1-2. 調査結果

<調査の実施概要（表1）>

- 先端部地区を利用したトレッカーやカヤッカー、釣り人から聞き取りを行い、計 67 組 145 名から回答を得た（表 1）。聞き取り結果は巻末資料 2 に収録した。
- 8 日間のうち、聞き取り対象外の利用者は 351 組であった。これは相泊の調査地点に数分しか立ち寄りなかった者を指し、聞き取りはせずに目視によるカウントのみを実施した。

表 1. 入域調査の実施日と担当者、聞き取りした組数と人数

日付	開始時間	終了時間	天候	担当者	聞き取り組数	聞き取り人数
7月28日	4:00	11:00	曇り	吉田	1	4
	11:00	18:00		茂木	1	1
7月29日	4:00	11:00	曇り	吉田	1	1
	11:00	18:00		茂木	1	1
7月30日	4:00	11:00	晴	茂木	3	6
	11:00	18:00			1	1
7月31日	4:00	11:00	晴	茂木	3	15
	11:00	18:00			0	0
8月11日	4:00	11:00	晴	照井	8	16
	11:00	18:00		茂木	6	13
8月12日	4:00	11:00	晴	照井	5	10
	11:00	18:00		茂木	7	13
8月13日	4:00	11:00	晴	照井	11	27
	11:00	18:00		茂木	4	6
8月14日	4:00	11:00	曇り	照井	9	21
	11:00	18:00		茂木	6	10
合計					67	145

<グループ人数（図2）>

- グループ人数は、1人から8人までと幅広く、「1人」が最も多く全体の4割を占めていた。「7人」、「8人」グループは各1組であった。

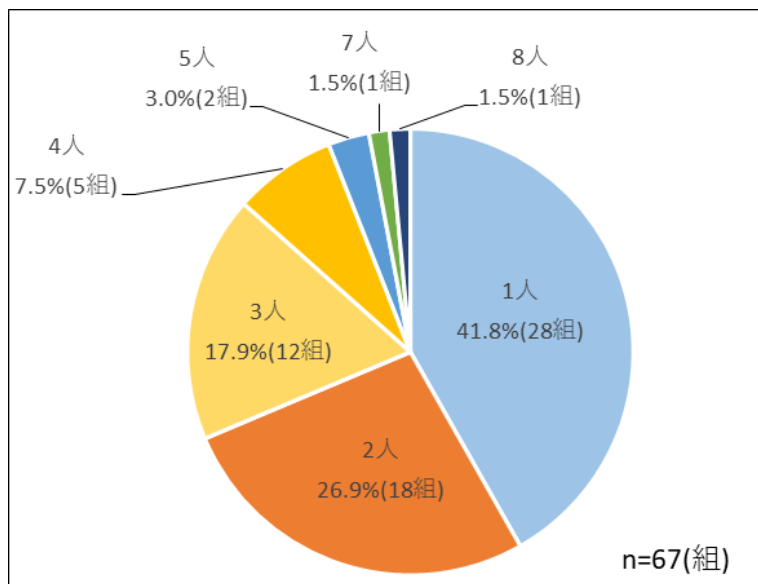


図2. グループ1組あたりの人数の割合

<年齢層（図3）>

- 先端部地区利用者の年齢層は、幅広く分布した。40代が最多であるが、特定の年代が突出することはなく、20代から60代まで一定の割合を占めた。調査に協力的でなかった利用者は4名おり、不明とした。

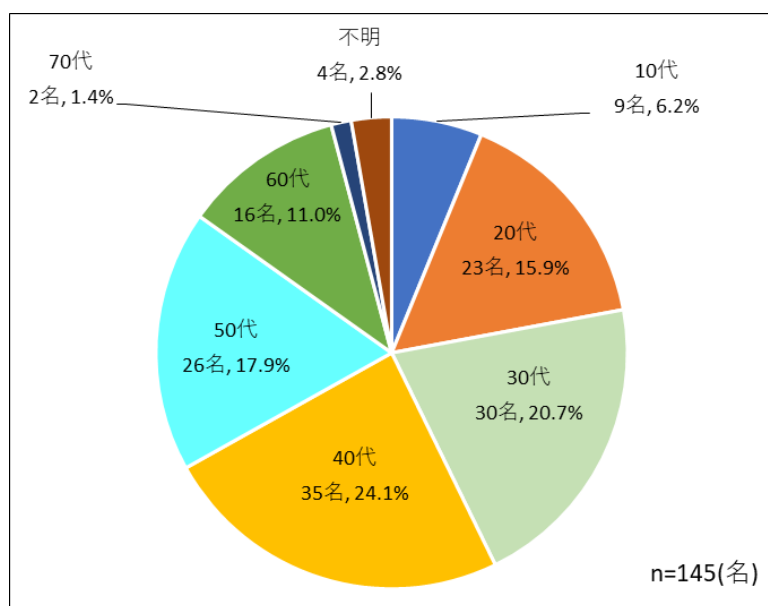


図3. 利用者の年齢層（人数）

<利用形態（図4）>

- 先端部地区の利用形態は主に「トレッキング」、「シーカヤック」、「釣り」で分類することができる。上記に該当する利用者へ聞き取りをした。
- 釣りが全体の8割を占めており突出していた。
- 釣り人の中には、通常の渡船の利用のほかシーカヤック、エンジン付きゴムボート、SUP¹を移動手段として釣り場へ赴く者がいた。詳細は11頁以降の<利用形態別のとりまとめ>で報告する。

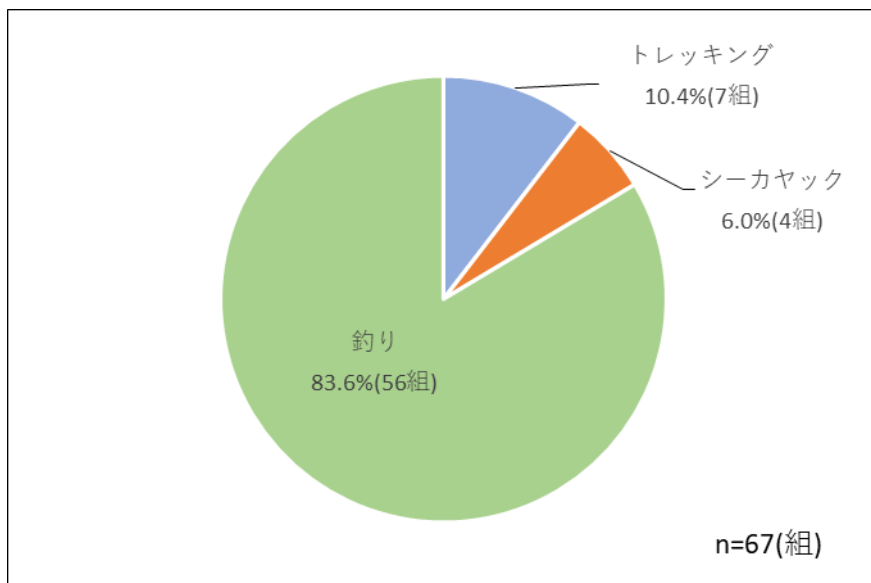


図4. 利用形態の割合

¹ SUP(サップ【Stand Up Paddleboard】の略であり、大きめのサーフボードの上に立ち、パドルを使って海や川等の水面を漕ぎながら進むアクティビティ)

<https://www.canoe.or.jp/disciplines/sup/>から引用

＜ヒグマ対策の状況（図5）＞

- ヒグマとの遭遇、回避をするための対策を講じた利用者は8割であった。
- ヒグマ対策を講じている利用者は、ヒグマ対策道具を複数所持しているケースが多く見受けられた。対策道具の具体的な内容（複数回答）について表2にまとめた。
- くまらず、クマスプレーが突出しており、それぞれが全体の4割を占めていた。

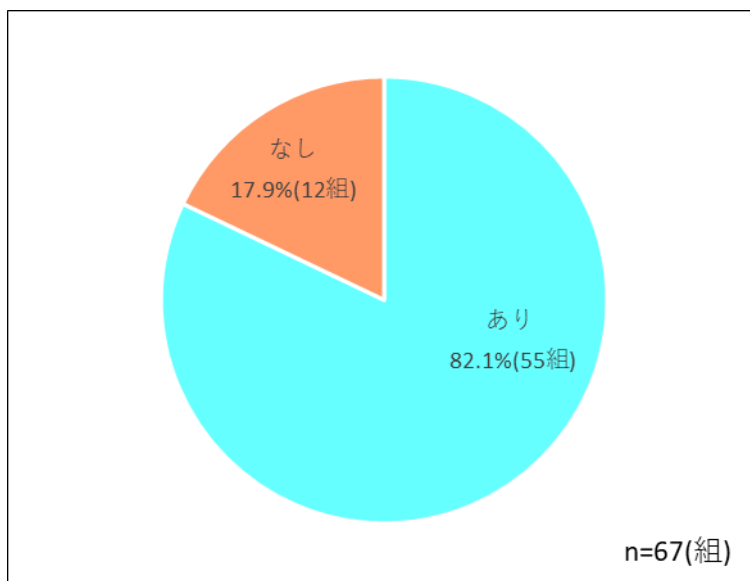


図5. ヒグマ対策の実施状況の有無

表2. 利用者が携帯したヒグマ対策道具（複数回答）

ヒグマ対策道具の携帯率	
くまらず	44.8%
クマスプレー	40.2%
笛	8.0%
爆竹	3.4%
フードコンテナ	2.3%
鉈（なた）	1.1%

<ルサフィールドハウスへの立ち入りの有無（図 6）>

- 67 組中 66 組から回答を得た。約 6 割の利用者がルサフィールドハウスへ立ち寄っていないことが判明した。

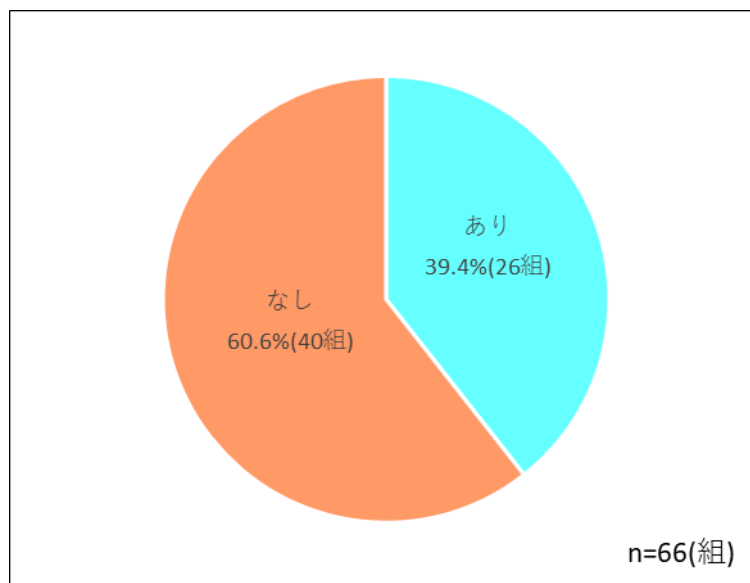


図 6. ルサフィールドハウスへの立ち寄り状況

<知床半島先端部地区利用の心得及びシレココの認知状況（図7）>

- 67組中66組から回答を得た。利用の心得及びシレココについて約7割が認知していないことが明らかとなった。

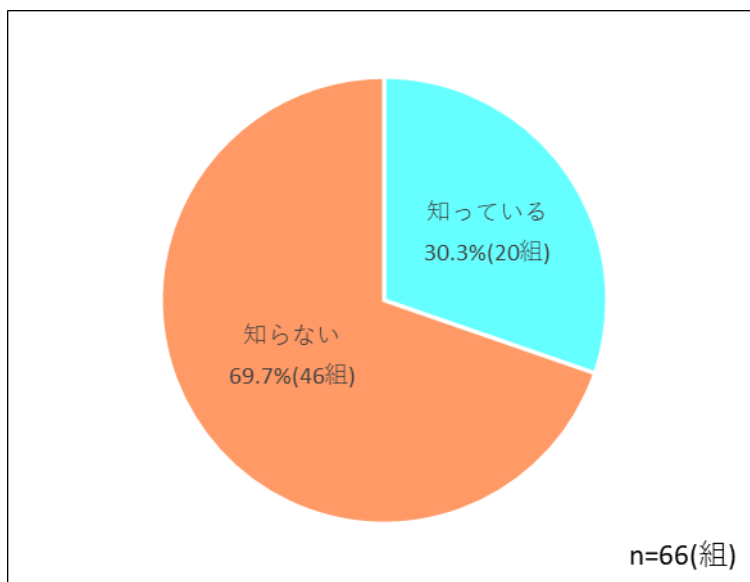


図7. 利用の心得及びシレココの認知状況の割合

<利用形態別のとりまとめ>

先端部利用の主要な利用形態である「トレッキング」「シーカヤック」「釣り」について、それぞれの詳細を以下に分析した。

➤ トレッキング利用者の聞き取り結果（表 3）

- 計 7 組（17 名）から回答を得た。
- 年代は、10 代から 50 代の幅広い年代が利用していた。
- 目的地は「岬（知床岬）」が最も多く 5 組、次いで「観音岩」「知床岳」がそれぞれ 1 組ずつであった。
- 行動予定（滞在期間）については、「2 泊 3 日」が最も多く 4 組、次いで「日帰り」「1 泊 2 日」「3 泊 4 日」がそれぞれ 1 組ずつであった。
- ヒグマ対策の有無について、聞き取りした 7 組全てがヒグマ対策を講じていた。
- ルサフィールドハウスの立ち寄り状況について、聞き取りした 7 組全てが当該施設へ立ち寄っていた。
- 利用の心得及びシレココの認知状況について、全ての利用者が認知していた。

表 3. トレッキング利用者の聞き取り結果一覧

No.	日付	パーティ数 (人)	年代	目的地	行動予定	ヒグマ対策の 状況(組数)		ルサフィールドハウスの 立寄り状況(組数)		利用の心得・シレココの 認知状況(組数)	
						有	無	有	無	知っている	知らない
1	7/28	1	40代	岬	3泊4日	○		○		○	
2	8/11	2	20代,30代	岬	2泊3日	○		○		○	
3	8/12	3	10代	岬	2泊3日	○		○		○	
4	8/13	7	30代,40代,50代	岬	2泊3日	○		○		○	
5	8/13	1	40代	観音岩	日帰り	○		○		○	
6	8/13	2	30代	岬	2泊3日	○		○		○	
7	8/14	1	40代	知床岳	1泊2日	○		○		○	
						7	0	7	0	7	0

➤ シーカヤック利用者の聞き取り結果（表 4）

- 計 4 組（19 名）から回答を得た。
- 年代は、10 代から 70 代の幅広い年代が利用していた。
- 目的地は、「ウトロ（半島周回）」が 2 組、次いで「羅臼（半島周回）」、「モイレウシ川」が 1 組ずつであった。
- 行動予定（滞在期間）については、「2 泊 3 日」「4 泊 5 日」「5 泊 6 日」「日帰り」を予定している、または行動した利用者がそれぞれ 1 組ずつであった。
- ヒグマ対策をしていると回答をした利用者は 4 組であり、聞き取りした全ての利用者がヒグマ対策を講じていた。
- ルサフィールドハウスへの立ち寄りの有無について、「あり」と「なし」それぞれを回答した利用者は 2 組ずつであった。
- 利用の心得及びシレココの認知状況について、全ての利用者が認知していた。

表 4. シーカヤック利用者の聞き取り結果一覧

No.	日付	パーティ数 (人)	年代	目的地	行動予定	ヒグマ対策の状況 (組数)		ルサフィールドハウスの 立寄り状況(組数)		利用の心得・シレココの 認知状況(組数)	
						有	無	有	無	知っている	知らない
1	7/28	4	40代	ウトロ(半島周回)	2泊3日	○			○		
2	7/31	8	10代,40代,50代,60代,70代	ウトロ(半島周回)	5泊6日	○		○		○	
3	8/11	4	30代,40代	羅臼(半島周回)	4泊5日	○		○		○	
4	8/13	3	40代	モイレウシ川	日帰り	○			○	○	
19						4	0	2	2	4	0

➤ 釣り利用者の聞き取り結果（表 5）

- 計 56 組（109 名）から回答を得た。
- 目的地は、「カモイウンベ川」が最も多く 32 組、次いで「クズレハマ川」が 16 組、「ウナキベツ川」が 2 組、「カモイウンベ川とクズレハマ川の両方」と「モイレウシ川」がそれぞれ 1 組ずつであった。「不明」は 4 組おり、行き先を決めていないとのことであった。
- 行動予定（滞在期間）は、全て日帰りの利用であった。
- ヒグマ対策の有無について「あり」と回答した利用者は 44 組、「なし」が 12 組であった。
- ルサフィールドハウスへの立ち寄りの有無について、「あり」と回答したのが 17 組、「なし」が 38 組、聞き取りができなかった利用者は 1 組であった。
- ルサフィールドハウスに立ち寄らなかった理由は、「早朝または夜間であったため閉館していた」、「当該施設の存在を知らなかった」という回答が多くを占めた。これらの利用者には、ルサフィールドハウスの場所や館内の説明を行ない、立ち寄ってもらうよう促した。
- 利用の心得及びシレココの認知状況は、「知っている」と回答したのが 10 組、「知らない」が 45 組、聞き取りができなかった利用者は 1 組であった。
- 釣り場までの移動手段は渡船によるもののほか、エンジン付きゴムボートとシーカヤックを用いた利用者がそれぞれ 2 組いたほか、SUP を使用した利用者が 1 組いた。エンジン付きゴムボートの利用者には動力船利用の上陸は禁止であることを伝えた。当該利用者は海釣りまたは河口釣りをするため、上陸するつもりはないとの回答であった。

表 5. 入域調査の釣り利用者の聞き取り結果一覧

No.	日付	パーティ数 (人)	年代	目的地	行動予定	ヒグマ対策の状況 (組数)		ルサフィールドハウスの 立寄り状況(組数)			利用の心得・シレココの 認知状況(組数)		
						有	無	有	無	不明	知っている	知らない	不明
1	7/29	1	10代	カモイウンベ川	日帰り	○			○			○	
2	7/29	1	30代	カモイウンベ川・クズレハマ川	日帰り	○			○			○	
3	7/30	3	不明	クズレハマ川	日帰り		○		○		○		
4	7/30	1	70代	クズレハマ川	日帰り		○		○		○		
5	7/30	2	30代,40代	カモイウンベ川	日帰り		○		○			○	
6	7/30	1	60代	モイレウシ川	日帰り	○			○			○	
7	7/31	3	30代	カモイウンベ川	日帰り		○	○				○	
8	7/31	4	20代,40代,50代	クズレハマ川	日帰り	○			○			○	
9	8/11	2	40代	カモイウンベ川	日帰り		○	○				○	
10	8/11	2	30代,40代	不明	日帰り	○			○			○	
11	8/11	1	30代	不明	日帰り		○		○		○		
12	8/11	1	30代	カモイウンベ川	日帰り	○			○			○	
13	8/11	4	20代,40代,50代	クズレハマ川	日帰り	○			○			○	
14	8/11	2	20代	不明	日帰り	○			○			○	
15	8/11	2	10代,40代	クズレハマ川	日帰り		○		○			○	
16	8/11	1	50代	ウナキベツ川	日帰り	○		○			○		
17	8/11	3	不明	不明	日帰り		○			○			○
18	8/11	2	20代,30代	カモイウンベ川	日帰り	○		○			○		
19	8/11	1	60代	クズレハマ川	日帰り		○		○			○	
20	8/11	2	60代	カモイウンベ川	日帰り	○			○			○	
21	8/12	1	30代	カモイウンベ川	日帰り	○			○			○	
22	8/12	1	50代	カモイウンベ川	日帰り	○		○				○	
23	8/12	1	50代	カモイウンベ川	日帰り	○		○				○	
24	8/12	5	20代	クズレハマ川	日帰り	○			○			○	
25	8/12	2	30代,40代	カモイウンベ川	日帰り	○			○			○	
26	8/12	2	50代	クズレハマ川	日帰り	○			○			○	
27	8/12	1	50代	カモイウンベ川	日帰り	○		○				○	
28	8/12	1	60代	クズレハマ川	日帰り		○		○			○	
29	8/12	1	40代	ウナキベツ川	日帰り	○			○			○	
30	8/12	2	10代,50代	カモイウンベ川	日帰り	○			○		○		
31	8/12	3	20代,50代	カモイウンベ川	日帰り	○		○				○	
32	8/13	1	50代	カモイウンベ川	日帰り	○		○			○		
33	8/13	1	60代	カモイウンベ川	日帰り	○			○			○	
34	8/13	4	20代,40代	カモイウンベ川	日帰り	○			○			○	
35	8/13	1	60代	カモイウンベ川	日帰り		○		○			○	
36	8/13	1	40代	カモイウンベ川	日帰り	○			○			○	
37	8/13	2	40代	カモイウンベ川	日帰り	○			○			○	
38	8/13	3	40代,50代,60代	カモイウンベ川	日帰り	○		○			○		
39	8/13	1	40代	クズレハマ川	日帰り	○		○				○	
40	8/13	3	10代,40代	クズレハマ川	日帰り	○			○			○	
41	8/13	2	50代	カモイウンベ川	日帰り		○		○			○	
42	8/13	1	40代	カモイウンベ川	日帰り	○			○			○	
43	8/14	2	10代,50代	カモイウンベ川	日帰り	○		○			○		
44	8/14	1	60代	カモイウンベ川	日帰り	○			○			○	
45	8/14	3	20代,50代	クズレハマ川	日帰り	○		○				○	
46	8/14	1	20代	カモイウンベ川	日帰り	○		○				○	
47	8/14	3	30代,60代	カモイウンベ川	日帰り	○			○			○	
48	8/14	3	20代	カモイウンベ川	日帰り	○			○			○	
49	8/14	1	40代	カモイウンベ川	日帰り	○			○			○	
50	8/14	5	20代,30代,50代	クズレハマ川	日帰り	○			○			○	
51	8/14	2	30代,40代	クズレハマ川	日帰り	○		○			○		
52	8/14	2	30代	クズレハマ川	日帰り	○			○			○	
53	8/14	2	40代,50代	カモイウンベ川	日帰り	○		○				○	
54	8/14	1	30代	カモイウンベ川	日帰り	○			○			○	
55	8/14	1	30代	カモイウンベ川	日帰り	○		○				○	
56	8/14	3	30代,60代	クズレハマ川	日帰り	○			○			○	
109						44	12	17	38	1	10	45	1

1-3. その他実施事項

調査の実施にあたっては、「利用の心得」から逸脱した不適切な利用（不十分なヒグマ対策、たき火の実施や不始末、番屋への宿泊、釣魚の投棄等）が認められた場合に利用者へ指導を行った。また、利用者からヒグマの目撃があった場合、聞き取りを行い記録した。なお、難所の状況変化があった場合に聞き取りをすることとしていたが、そのような情報は得られなかった。

<利用者への指導>

本調査において、十分なヒグマ対策を取っていなかった 11 組に、ルサフィールドハウスでクマスプレーやフードコンテナがレンタルできることや、ヒグマの遭遇回避のための音出しなどの指導を行った。たき火の実施、ゴミの投棄、番屋への宿泊、釣魚の投棄等は確認されなかった。

<ヒグマ目撃情報>

本調査でヒグマ情報について 1 組から聞き取りを行った。目撃件数は 2 件、それぞれ単独個体で合計 2 頭、目撃場所は化石浜とモイレウシ川であった。これらの情報は、速やかにルサフィールドハウス及び知床羅臼ビジターセンターへ提供した。

<入林簿の記載率（図 13）>

本調査中に聞き取りをした利用者が相泊に設置された入林簿に記載している割合を確認した。入林簿に記載したのは 67 組中 5 組（7.6%）であり、記載率は低かった。

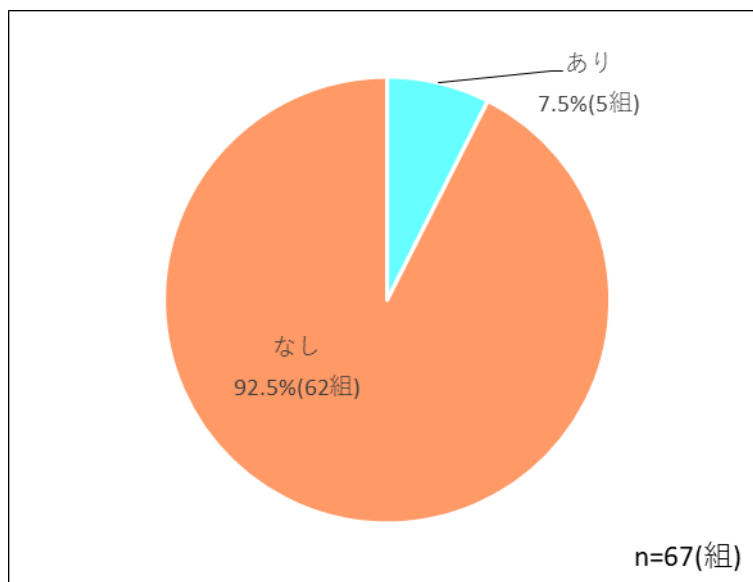


図. 13 調査対象者における入林簿記載割合

2. 2020 年度から 2022 年度に実施した調査結果の取りまとめ

先端部利用者の動向を把握するため、同調査は 2011 年度から 10 年間にわたり船舶を利用し海岸トレッキングルート上で行われてきた。2020 年度には、トレッキングルート上での入域調査と出発地である相泊での入域調査を実施し、どちらの聞き取り組数が多いのか比較することで、調査手法の検討を行った。その結果、相泊で行った入域調査の方が短い期間で数多く聞き取りすることができた。そのため、2021 年度に続き、今年度も相泊のみで入域調査を実施した。

本章では、同様の調査手法で実施した過去 3 年分の入域調査の結果を統合し、利用状況の年推移の把握を行う。併せて、今後の適正な利用の推進と調査手法の効率化について検討を行った。

2-1. 分析の方法

- 2020 年度から 2022 年度までの 3 年分の調査結果をとりまとめ、およその推移の把握を試みた。分析対象は、141 組 315 名である。
- 2020 年度から 2022 年度の調査時間や場所、聞き取り内容は同一であるが、調査日と回数に違いがある。各年の調査概要を表 6 に示す。
- 分析する項目は、①利用形態②ヒグマ対策の状況③ルサフィールドハウスへの立ち寄りの有無、④利用の心得及びシレココの認知状況を中心に行うこととした。

表 6. 過年度の調査概要

調査実施年	調査期間	調査日数	聞き取り数(組)	調査項目	その他
2020 (令和2) 年	7月21日～7月25日	5日	27	パーティーの人数、年代、アクセス方法、目的地、行動予定、ヒグマ対策の状況、ルサフィールドハウスへの立ち寄りの有無、利用の心得及びシレココの認知状況	利用者への指導、難所の状況変化(落石や崩落等)、ヒグマの出没状況
2021 (令和3) 年	7月22日～7月25日 8月7日～8月10日	8日	47		
2022 (令和4) 年	7月29日～7月31日 8月11日～8月14日	8日	67		

2-2. 分析の結果

<利用形態（図9）>

- 3カ年で釣りの利用者が最も多く全体の65.4%(93組)を占めていた。
- トレッキングの利用者が占める割合は、2020年度で40.8%（11組）、2021年度は31.9%（15組）、2022年度は10.4%（7組）となり、減少傾向である。
- シーカヤックの利用者が占める割合は2020年度で22.2%（6組）、2021年度は8.5%（4組）、2022年度は6.0%（4組）であり、減少傾向にある。
- 釣りの利用は2020年度で37.0%(10組)、2021年度は59.6%(28組)、2022年度は83.3%（55組）であり、組数、割合ともに大きく増加している。
- 釣りの移動手段は、渡船によるものを想定していたが、今年度の調査ではエンジン付きのゴムボートやシーカヤック、SUPを用いる例が確認されており、利用形態の多様化が示唆された。
- トレッキングとシーカヤックの利用者からは「知床半島沖で発生した観光船沈没事故」に関するコメントがあった。これらの利用形態の減少に影響を与えた可能性が考えられる。

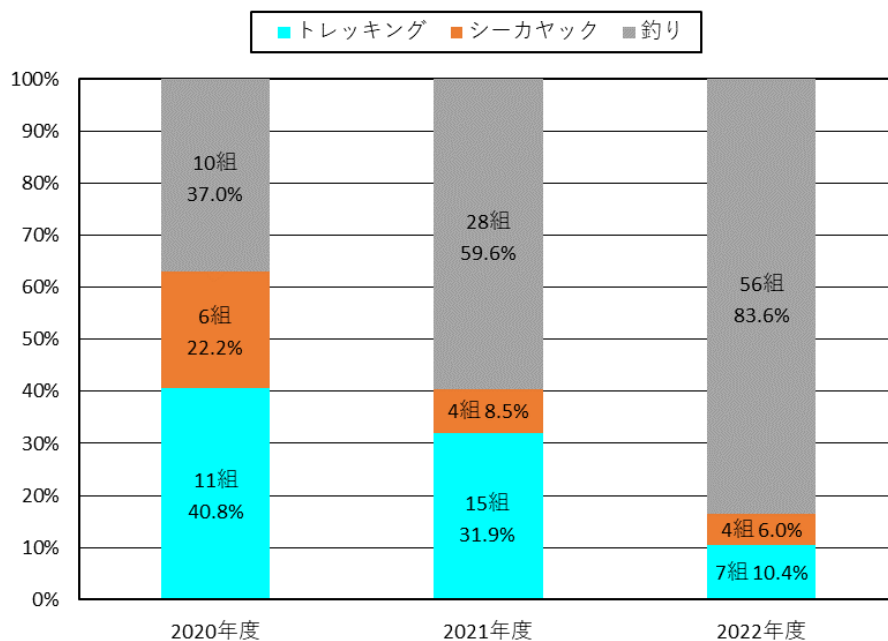


図9. 過年度の入域調査の利用形態の割合（2020年度から2022年度まで）

<ヒグマ対策の状況（図 10）>

- ヒグマ対策を講じている利用者は3年間の平均で約7割が実施しており、その割合も増加傾向にある。ヒグマ対策に対する意識の向上や普及効果が示唆された。

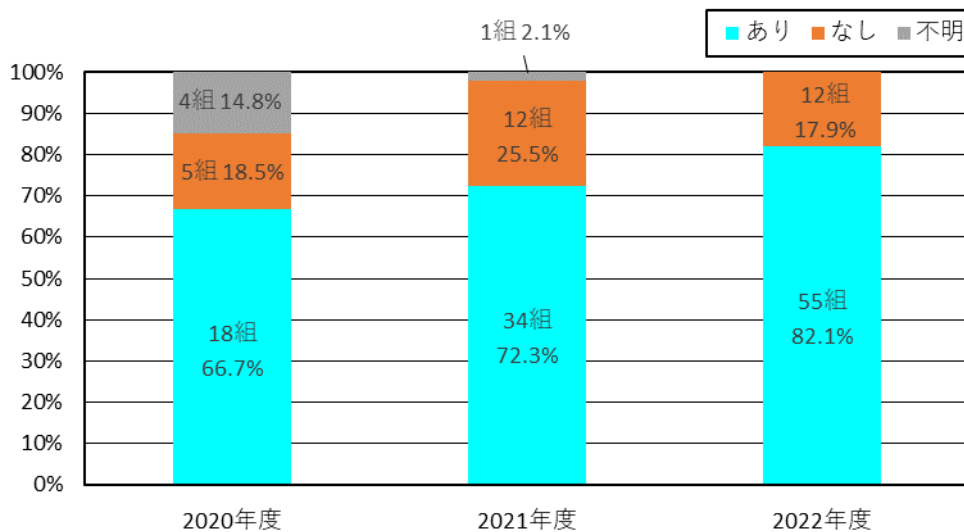


図 10. 過年度の入域調査によるヒグマ対策の実施状況（2020年度から2022年度まで）

<ルサフィールドハウスへの立ち寄り状況（図 11）>

- 3年間の総計では、約4割の利用者がルサフィールドハウスへ立ち寄っていた。
- 利用形態別で最も立ち寄りが少なかったのは「釣り」の利用者であり、3年間の平均での立ち寄り割合は約3割に留まった。来館しなかった理由は、「先端部地区の利用時間が早朝または夜間であったため、閉館していた」「施設の存在を知らなかった」といった回答が中心であり、3年間で特に変わらない。
- 一方、トレッキングの利用者の立ち寄り割合が最も高く、3年間の平均で約6割であった。2022年度は7組という少ない聞き取り件数ではあったが、すべての利用者がルサフィールドハウスへ立ち寄っていた。立ち寄った理由の聞き取りは出来なかったが、利用前にSNSやインターネットだけでは得られない先端部地区の最新情報を入手することが目的であったと考えられる。

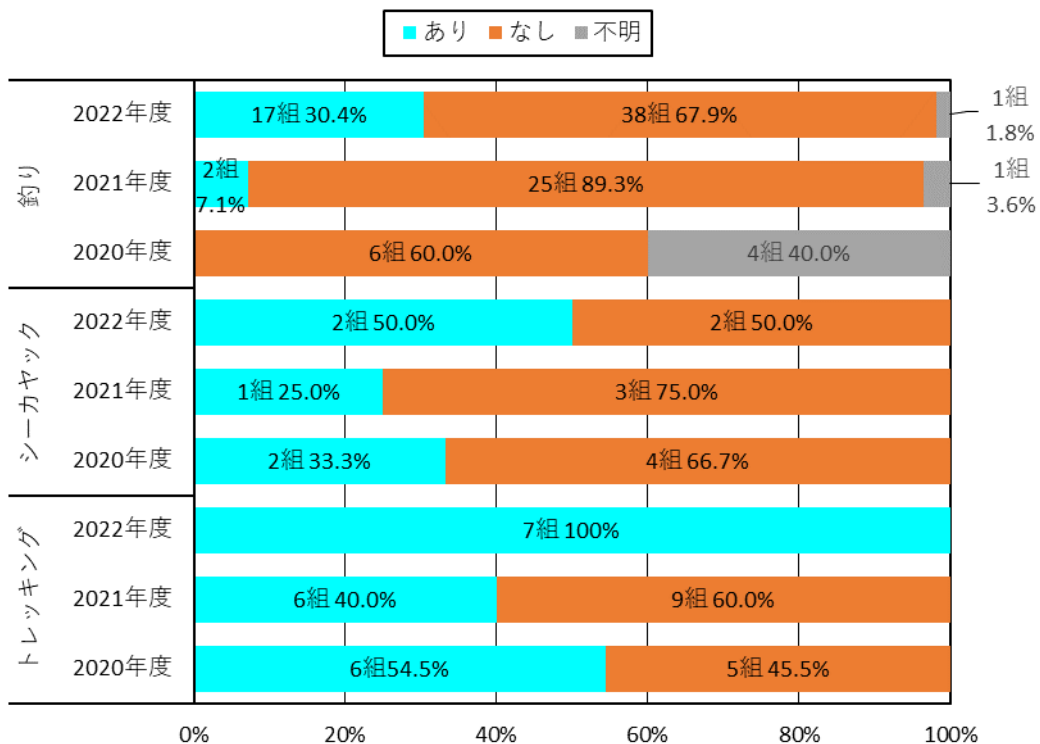


図 11. 過年度の入域調査によるルサフィールドハウスへの立ち寄り状況の結果 (2020年度から2022年度まで)

<利用の心得及びシレココの認知状況（図 12）>

- 3年間の総計で利用の心得及びシレココの認知率は4割程度である。利用形態別で言うと、釣り利用者の認知が最も低く、2割程度である。その理由として「存在を知らない」との回答が最も多かった。これらの利用者は「先端部地区」といった用語を知らない場合も多く、「特別な場所」「立ち入りのルールが設けられた場所」といった認識そのものが低いと考えられる。
- 一方、認知の割合が高いのはトレッキングの利用者であり、3年間の総計で約7割の認知率だった。これらを知ったきっかけとしては、「ルサフィールドハウスで知った」「インターネットで検索したら、シレココが該当した」などの回答があった。このようなことから、トレッキングの利用者の多くは事前に情報収集をしており、情報発信の効果も高いと考えられる。

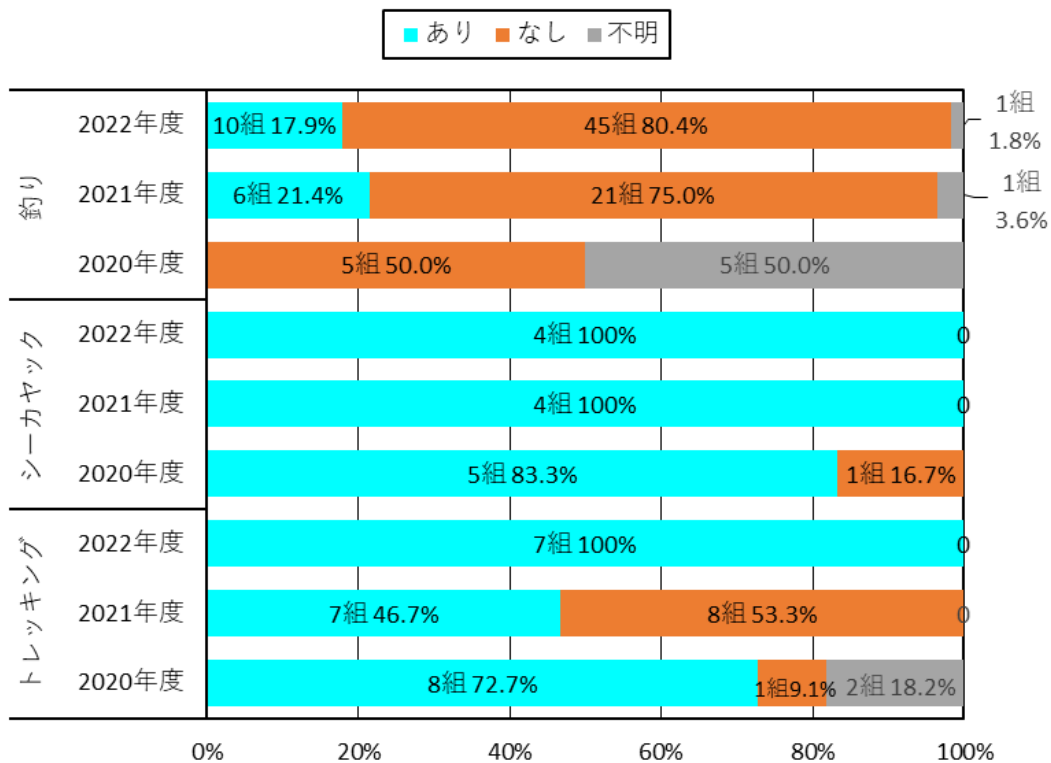


図 12. 過年度の入域調査による利用の心得及びシレココの認知状況の結果（2020年度から2022年度まで）

3. まとめと考察

3-1. 調査手法について

現行の調査手法での実施は今年度で3年目となる。本稿では、次年度以降の調査手法のあり方について考察する。調査地点は同様に相泊とすることが適当である。相泊での入域調査の利点は、①各利用形態の出発地、帰着地になっている②利用者のいる時間帯を狙って長時間の調査ができる③調査中は車両で待機しているため、雨天でも実施することができるなどである。

調査時期は、大潮の時期に調査日を設定することで、海岸トレッキング利用者の動向を把握することができる。シーカヤックについても比較的海上が穏やかになる7月から8月にかけて調査を実施することが望ましい。

調査項目は、利用形態の多様化を踏まえた見直しが必要である。特に、従来「利用形態」としていた項目の再検討が必要である。今年度の調査では、釣りを目的とする利用者がシーカヤックやエンジン付きゴムボート、SUPなどを用いて移動する例があった。

このような利用形態の多様化を調査結果に反映させるためには、利用形態を整理、細分化し、「移動手段」「利用目的」「移動経路」など、複数の調査項目により重層的に把握することが望ましい。

また、今年度のトレッキング利用者への聞き取りでは、ルサフィールドハウスへの立ち寄りについて100%立寄ったという結果となった。そこで来年度以降は、この中の何組が先端部に関するレクチャーを受講していたのか明らかにするため、調査項目に「レクチャー受講の有無」を追加し、より詳細な状況の把握につなげたい。さらに、ルサフィールドハウスに立ち寄らなかった利用者にはその理由を聞き取りすることで、今後の広報周知に役立てることが可能である。次年度の調査票の案を図14に示す。

2023(R5)年度 環境省事業 知床半島先端部地区利用状況調査業務 調査表 整理No.

日時：2023年 月 日【 : ~ : 】 天気：晴・曇り・雨

場所：相泊

調査員：【 】

ヒアリング ・ 目視

利用形態	トレッキング・シーカヤック・釣り・その他()
移動手段 (釣りの利用者のみ)	シーカヤック・エンジン付きゴムボート・SUP・その他()・不明
★目的地	知床岬・知床岳・知床沼・カモイウンベ川・クズレハマ川・ウナキベツ川・ウトロ・相泊 その他()・不明
★行動予定	泊 日【宿泊地:1日目 2日目 3日目 4日目 5日目 予備日:有(日間)・日帰り・不明
ヒグマ対策の状況	有【スプレー・フードコンテナ・くまずす・笛・その他()】 無・不明
ルサFHへの立ち寄り	有・無・不明【無の場合、理由を聞き取り()】
ルサFH立寄り有りの場合	レクチャーを受講している。 Yes (受講者証No.)・ No
利用の心得・シレココ	知っている・知らない・不明
グループ構成人数	人(男:)人(女:)人
★年齢層	10代(人)・20代(人)・30代(人)・40代(人)・50代(人) 60代(人)・70代(人)・その他()・不明
居住地	北海道・東北・関東・中部・北陸・近畿・中国・四国・九州・沖縄 国内不明・アジア・ヨーロッパ・北アメリカ・南アメリカ・オセアニア・海外不明・国内外不明
所属	個人・ガイドツアー・大学ワンゲル・社会人山岳会・マスコミ・その他
自由欄	服装(色): 身長: 相泊までの移動手段:車・バイク・自転車・徒歩・その他 ザックのカラー: 入林簿の記載:有・無 ※聞き取り調査後に入林簿の記載を確認すること 有の場合、詳細を記載 計画書の提出先:入林箱・警察・海保・ルサFH・羅臼VC・車内
	灰色部分は必ず聞き取りしてください。相手に余裕があれば、灰色以外の項目も聞き取りしてください。
★	レクチャー受講者証を所持している方は、★部分のみ聞き取りをする。未記入箇所は、先端部レクチャー記録のNo.と照らし合わせをし、追記する。

図 14.調査票の見直し案

3-2. 今年度の調査結果に関する考察

ここでは、ルサフィールドハウスの立ち寄り状況と利用の心得及びシレココの認知状況に関する考察と提案をまとめた。

＜ルサフィールドハウスへの立ち寄り状況＞

当該施設の立ち寄り状況は、全体の6割が「立ち寄らなかった」と回答した。新型コロナウイルス感染拡大の影響により三密を避け、施設を利用しなかった可能性も考えられる。立ち寄らなかった利用者を利用形態で見ると「釣り」が最多であった。1章の「利用形態別のとりまとめ」で立ち寄らない理由を記載したが、当該利用者の聞き取りは早朝に集中しているため、羅臼町へ前日入りしないと来館することは不可能である。現状は、聞き取り調査後にルサフィールドハウスへ来館するよう促すことしかできない。

一方、「トレッキング」は全ての利用者がルサフィールドハウスへ立ち寄っていた。トレッカーは、行程中の危険個所の状況を把握するため、ルサフィールドハウスへ事前に立ち寄る傾向にある。来年度以降の調査では、ルサフィールドハウスへの立ち寄り状況を確認するとともに、レクチャー受講の有無についても併せて聞き取りを行い、レクチャー受講の推奨と事故防止につなげていきたい。

＜利用の心得及びシレココの認知状況＞

利用の心得及びシレココの認知状況は、認知していない利用者の割合が全体の約7割に相当した。「認知していない」と回答した利用者を利用形態別にみると、「釣り」が最多であった。

釣りの利用は、動力船による渡船を前提とするなど、先端部地区の利用形態としては特殊な位置づけであり、心得においても例外的な扱いである。これらの利用形態の実態把握やルール等の周知方法については、渡船業者の協力を得るなど別途工夫が必要と考えられる。

3-3. 過年度の入域調査との比較に関する考察

ここでは、3年間の入域調査について「利用形態」「ルサフィールドハウスの立ち寄り」「利用の心得及びシレココの認知」に関する考察と提案をまとめた。

<利用形態>

3年間の利用形態で「釣り」の利用者が最多であった。年々増加傾向にある背景として、斜里町の一部河川に河口規制²³がかかっていることが挙げられる。本調査で多くの利用者から「斜里町の各河川の河口規制のため、羅臼に来訪した」という声を聞き取った。また、1章の「利用形態」でも記載したが、釣りの利用者の一部が移動手段として「シーカヤック」「エンジン付きゴムボート」「SUP」などを使用している。斜里町や羅臼町の河口規制が今後も続くようであれば、先端部地区の釣りの増加と共に利用形態の多様化が進行し、さまざまな問題が発生する懸念がある。

次に利用の多かった「トレッキング」は、3年連続でその割合が減少した。その要因として、新型コロナウイルス感染症の拡大や4月に発生した知床半島沖の観光船沈没事故の影響が指摘できる。これらの影響が一過性の現象なのか、今後も減少傾向が続くのかについて、今後も注視する必要がある。

「シーカヤック」の割合もトレッキングと同様に3年連続減少しているが、利用形態全体に占める割合がもともと少ないこともあり、3年間のデータだけで増減の傾向を判断することは難しい。

² フィッシングルール 2022 Rule&Manner にて斜里町のイワウベツ川、オンネベツ川、奥蘂別川、斜里川等、は河口付近等でさけ・ますを採捕することを禁じられているが、禁止期間はそれぞれの河川によって異なっている。

<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/sr/ggk/ggs/turi-r-m/rule-manner.html>

³ 幌別の釣りを守る会と知床ヒグマ対策連絡会議を構成する行政機関が協議し、2021年と2022年に幌別川の立ち入り自粛を要請している。

＜ルサフィールドハウスの立ち寄り状況＞

3年間の聞き取り調査で、約6割強の利用者がルサフィールドハウスへ立ち寄っていないことが判明し、その多くが釣りの利用者であった。第2章の「ルサフィールドハウスへの立ち寄り状況の結果」において、その理由を考察したが、現状のままでは今後も立ち寄り者数が増加に転じることは難しい。相泊以北が先端部地区であると認識が薄いことも一因であると考えられる。一方、トレッキングの利用者の立ち寄りは3年間で増加傾向であることは、2章で記載したとおりである。次年度の調査ではレクチャー受講の有無を調査項目に追加し、経年で比較できるデータを蓄積させていきたい。

＜利用の心得及びシレココの認知状況＞

調査初年度の2020年度は全ての利用形態に占める『利用の心得及びシレココ』を「認知している」利用者の割合は約6割だった。2021年度、2022年度のそれは約4割まで減少していた。

2020年度に最も多い利用形態はトレッキングであったが、トレッキング利用者は他の利用者よりも『利用の心得及びシレココ』の認知度が高いことが明らかになっている。一方、増加傾向にある釣りの利用者は『利用の心得及びシレココ』の認知度が低く、利用形態がこれらに深く関係していると考えられる。

そもそも『利用の心得及びシレココ』に記載されているサケ・マスなどの釣り利用は、海釣りや渡船での特定場所での利用を想定しており、実態との乖離も見受けられる。また、釣り行為そのものについては、別途さまざまな既存のルールが存在しており、強制・任意を含め複数のルールが並列している状況である。

今後は、釣りを主目的とする利用者の数や行動、属性等について把握・分類し、それぞれにとって望ましい、必要なルールの普及方法等を検討する必要がある。

令和 4 年度 環境省北海道地方環境事務所釧路自然環境事務所 請負事業

事業名:令和 4 年度 知床半島先端部地区利用状況調査

事業期間:令和 4(2022)年 4 月 21 日～令和 4(2022)年 12 月 9 日

事業実施者:公益財団法人 知床財団

〒099-4356

北海道斜里郡斜里町大字遠音別村字岩宇別 531 番地



リサイクル適正の表示:紙へリサイクル可

この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料(A ランク)のみを用いて作製しています。